

特集 この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

北海道日本ハムファイターズチーフ・ベ이스ボール・オフィサー
前WBC日本代表監督

栗山英樹先生



栗山 英樹（くりやま ひでき）先生（略歴）

- 一九六一年 東京生まれ
 - 一九八四年 東京学芸大学教育学部卒業後、ヤクルトスワローズに入団。遊撃手として一軍デビュー
 - 一九八九年 ゴールデン・グラブ賞のタイトル獲得
 - 一九九〇年 現役引退
 - 一九九一年 野球解説者・スポーツキャスターとして活躍（一二〇一一年）
 - 二〇〇二年 北海道夕張市栗山町に、少年野球場「栗の樹ファーム」を建設
 - 二〇〇八年 白鷗大学教授に就任
 - 二〇一二年 北海道日本ハムファイターズの監督に就任
チームをリーグ優勝へと導く。
 - 二〇一六年 監督を務める北海道日本ハムファイターズが日本シリーズで優勝
 - 二〇二二年 北海道日本ハムファイターズ監督を辞任
同年、野球日本代表監督に就任
 - 二〇二三年 学校法人北海学園特任教授に就任
 - 二〇二三年 二〇二三ワールド・ベ이스ボールクラシックで日本代表を優勝に導く。同年、北海道日本ハムファイターズCBOに就任
- *主な著書に、『信じ切る力』『栗山ノート』『栗山ノート2 世界一への軌跡』『監督の財産』『育てる力栗山英樹『論語と算盤』の教え』『最高のチーム』の作り方』などがある。

編集部 昨年開催されました二〇二二ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)における日本チームの優勝は、日本人がコロナ禍で元気を失っていた中で、私たちの心を歓喜に導いて、そして鼓舞させてくれるものであったと深く感謝しています。

栗山 いや、僕は何もやっていないので。

編集部 三月十日、韓国戦だったと思うのですが、私も校長会で他校の校長先生方とテレビに釘付けになっていたことを思い出します。本当にうれしかったです。



「侍ジャパン」の愛称で呼ばれる日本チームは、我が国の野球界を代表する優秀な一流の選手が集まっていたと思います。そうした力量のある選手一人一人の心をまとめて、そして一つのチームとして機能させて、結果として優勝に導くことができたというのは、栗山監督の見事なリーダーシップと先見性、采配力のためのものであったと感服しています。実力、実績、そしてプライドも非常に高

い選手たちだったと思いますが、そうした選手が集まる中で、それぞれの長所を生かし、またぶつからないようなチームづくりというのをどのようにされたのか。そのことは私たち校長にとっても学校経営につながるものがあると思っています。

まず、そうした視点から、栗山監督は監督としてどのようなことを重視してチームづくりに臨まれていたのか。また、組織を動かす上で心がけていらっしやること、例えば組織を活性化するための工夫などあれば、教えてください。栗山 そのように言うてくださるのはありがたいのですが、本当に僕は何もやっていません。コロナ明けで世の中が疲弊していたり、子供たちの数が減って野球人口も減ったために廃部に追い込まれるクラブが増えたりしている野球界の状況など、いろいろな背景を含めて、今回の大会は、本当に勝ち切らなければいけないと選手たちが思ってくれたことが一番だと思います。皆さんの采配のように言うてくださいますが、僕が何かしたかという、何もしていないのでね…。

日本ハムファイターズの監督だった時代からやり方は全然変わっていないんですけれども、確かに人をまとめる

いうのはめっちゃ難しいので、最初からまとめようとは思っていないとか、まとまらないので、「虎は虎のまま使え」という感覚です。それぞれの個性を生かして、どういふうにこつちが使わせてもらった勝つのかなど、結果が出てくると人間は一つにまとまりやすいので、例えば、できなかつたことができるようになったと喜ぶような体験が人を前に進めると思っています。そういうところをどうお手伝いするのか、そんなことしか考えていなかったですね。

WBCに関しては、まず勝つためにはどういふことが必要なのか。選手たちにつだけ思っただけはしかなかったのは、もし世界一になるのだとすれば私心を捨ててもらおう。「稚心を去る」というんですかね、要するに、「俺のことどうなってるの、俺のこと気にしてよ」、みたいな幼心を捨ててもらおうことが一番だと思っただけで、そのために幾つか、手紙を書いたり選手に直接話したり、そういうことはしましたけれど、それぐらいですね、気を付けたことは。僕よりも選手のほうが一流なので、こちらの意図も酌んでくれますし、ああいうチームはなかなかできないだろうなと思いました。

編集部 「虎は虎のまま使え」というお話がありました、なるほどと思いました。虎のまま使うんだけれども、幼心とか、「(自分を)見て見て」という気持ち捨てさせる。そのために手紙を書いたり直接話をしたりすることで、選手一人一人の良さを見いだし、生かして、チームとしての一つの組織づくりにつなげられたんだなと、改めて思いました。

さすが栗山監督はすばらしいです。校長にもありますが、リーダーになったときにどうしても口を出し過ぎてしまうというところがあると思うんですけども、監督が考えるリーダーの資質は何ですか。

栗山 僕はよく「僕が次の監督を選ぶとときに、担がれる人」という表現をしています。政治でもそうだと思いますが、学校でも、校長先生は誰も口答えできないみたいな、威厳とか、そういう時代があったと思うんですよね。野球もそうで、絶対的なオーラをもった人というのがいらつしゃったのですが、そういうものがなくなっていくんですね。要するに、実績とか立場とかいうことではなくて、今の子どもたちが心を開く瞬間とかいうのは、自分のことを本当に真剣に考えてくれると思ったときに心が開かれています。

くという感覚だと思つたので、能力があるとか実績があるとか、そんなことよりも、「この人のためだったら手伝いたい」という気持ちになる人がいますよね。そんな担がれる人がリーダーの資質の最上位にあると思つているので、今回も僕は何もしていない。本当に何もしていないので、多分選手たちが、「監督はちよつと頼りないから、俺らが頑張つて勝つてあげないとかわいそうだよ」みたいな感じだったと思うんですよ。選手にそんなことは話さないですけども、そういう意味では、僕が感じていることはそんなに間違つていないのかなと思ひますね。そうじゃないと僕みたいなタイプは監督としては成り立たないと思つています。

編集部 同じことが教員集団にも言えるかなと思つたのですが、校長一人では何もできないので、「校長先生を助けてあげようかな」とか、「思いをつなげてあげようかな」とか、「実現させてあげようかな」という、人間関係づくりが大事なんだろうなと感じました。

そういう中で、監督はリーダーとしての資質を高めるために日頃から努めていらつしやることはありますか。

栗山 どういう人が担がれる人なのかというと、先ほど、「口を出し過ぎると人が伸びない」とお話をしましたが、企

業のトップと話していても、自分の専門分野の人が成長しないとよく言っていますね。要するに、答えが分かっているのに、それを先に言つてしまつてどうしても人が伸びてこない。自分で考えて自分で失敗をしないので人が伸びないというようなことを皆さん言われます。

そういうふうに考えたときに、僕は「慎独しんどく」（「人目のないところでも人の道に外れたことはしない、他人が見ていなくても自分を絶えず律していかなければならない」の意。中国の古書『大學』が出典の故事成語）という言葉を使つていますけれども、二四時間三六五日ずっとカメラが自分の上から照らしていて、それを子供たちが見ていて、この人だったら信頼できるなという生活を自分が見ているかどうか、それが伝わるのだと思つています。ですから、その人の能力とかそんなものよりも、一生懸命何かしようとしていて思ひみたいなのが、人が「この人のために……」と感じて動く要因になるのではないかと思つています。

例えば、監督室の黒板に「挨拶負けをするな」というようなことを書いていましたが、挨拶一つとっても、選手たちから僕らに挨拶する、それは逆ですよ。僕ら側が選手たちに先に笑顔で挨拶をしてあげると選手が笑顔で応える。

その環境をつくるのに、逆になってしまっているという感じがしました。そういう姿が結局周りのスタッフを動かしたり選手の心を前向きにさせたりすると思っていました。僕が考えていることが合っているかどうか分からないけれども、現場にいてそういうことが重要だろうなと思っていたので、ふだん一人でいるときに何をしているかとか、全部はできていないんですけれども、気を付けるようににはしていましたね。

編集部 人前だけでなく、一人でいるときでも行いを慎むということですね。

栗山 こういうことを具体的にやるとか、こういう手を打つとか、そういうことよりもそっちのほうが大事なような感じは、一〇年間監督をやらせてもらって感じました。

編集部 ということは、二四時間自分自身を磨き、慎んで戒めていらっしやった。

栗山 選手にやってほしい生活を自分がまずやってみる、それじゃないと言う権利はないという感覚が大事なかなと思っていたので、特別何か——もちろん選手にも語りかけますし、言葉もかけますが、僕が考えたことはゼロに等しいんですね。いろいろな先人のやってきたことを参考にさ

せてもらっていて、選手が入団してきたときには、プロ野球選手になってうれいでしょうが、苦しむことも多いだろうなと思って、選手に本を渡したりする。それは、哲学者で教育者でもあった森信三先生の「元服のときに一生の書を持たせるべきだ」というのを読んで、僕もそうしてあげようと思っただけです。

そういう先人が必要なことを言ってくれていることを野球に置き換えてやっていただけなんです。僕がやっていることは実は先人の方がやったことばかりだったので、やってみてそれが意味があるのか、この場合には意味がないのかというのを自分で感じ取って、捨てるものは捨てて、やるものは続けてという感じではあったんですけれども、そういうふうにごちらが苦しんでもがいているときほど人が反応するという感じは少なからずあったので、そういうのは大きなこと感じました。

編集部 日頃からの関係づくりが大事ということですね。

栗山 僕はコーチたちにも選手の話全部真剣に聞いてやってくれと言っていました。そういうことももちろんあるんですが、自分がそういう生きざまをしているのかどうか。例えば試合中に、代打を全部使っていて、最後一人し

か残っていないくて、さあ行ってくれというときに、「打てないかもしれないけれども行ってくれ」と思っていていいのか、それとも、「俺はおまえのことを信じている、絶対打つ」と思って送り出しているのか、自分の心の中に何かあるじゃないですか。そのときに、選手に「さあ行ってくれ」と言いながら駄目かもしれないと思っっている自分に対して一晩落ち込むとか、形とか実際にやったことは大事ですけれども、そっちがやっぱり大事な、そう思っている自分が駄目だなどか思いながら、何とか自分を律するというんですかね、そういう感じだったんです。

僕の話、よく分からないんですよ。分からないですよね（笑声）。これがいいと思っっていないし、僕がそう思っただけで、答えが出ているわけでもないんです。もがき苦しんでいる選手のために、どうしてあげたら一番この子のためになるのかというだけの話なので。

編集部 それは私たち校長にもつながる部分があって、教員に対して、特に子供に対して、「どうしたらこの子を伸ばしてあげられるんだろう」「どうしたらこの子にとって一番いい結果を導き出す手伝いができるんだろう」と思いながら過ごしています。監督の御著書にもありますけれど

も、「信じ切る」ということが大切だな、それができないと駄目だろうなと思っています。

今のお話にも通ずるところがあるかもしれないですが、WBCでは日本中が日本チームに期待をされていて、心から応援していたと思うんですね。その声援というのは監督にとっても選手にとっても大きな支えになったり勇気になったりしていたと思うんですけれども、一方で、この状況だったら何としても勝たなければという思いもどこかにあったのではないかな、責任や重圧を感じる場面もあったのではないかなと思います。そうしたプレッシャーにどのような監督は立ち向かっていったのか、向き合ったのか、教えていただけたらと思います。



栗山 確かに、アメリカは、今回はメジャーの超一流選手たちが出てきたので、このメンバーをアメリカでやっつけたら、してやったりだろうなとわくわくするような感じというのはいくらもありました。「このまま行くぞ、不安になってたまるか」



と思つてずつとやっていましたけれど、あの状況を考えてときに、「負けたら日本に帰れないんだろうな」とも思っていました。

校長先生方も、苦しいと思います。今、教育がすごく難しくなっていて、親御さんの問題とか権利の問題とか子供たちの言

うこととかいろいろ聞きますけれども、多分校長先生を退職されたら——僕も、監督を終わつて、今あまり面白くないんですよ（笑声）。やることはたくさんあるのですが、あのぎりぎりのところに追い詰められて何とかしなければいけない状況で必死に考えている自分というのは、そのときはむしろくちや苦しんでいるんですが、「これが生きていくということなんだろうな」「これ以上楽しいことはないな」と思えるんですよ。先生方は大変ですけれども、もしかしたら子供たちを救つてやれるという立場にいるというのは最高の場所かもしれない。人が生きるといふのはそういうことなんだろうな、いい経験をしたなと僕は終わつて思っ

ているんですね。

もともと、日本ハムファイターズで監督をやっているときからそう思つてはいたんですね。この状況は大変だけれども、これだけ勉強させてもらえる場所はないんだろうなと思つていました。ですから、負けたらどうしようというときに、いやいや、この勝負をさせてもらおうというのは、野球をやっている人間にとつてこんなありがたいことはない。特に、僕みたいにテスト生でプロに入って駄目だった人間がこの勝負をさせてもらえるというのは感謝しかないだと、本当にそう思つていました。でも、不安は大きくなつていきます。ただ、それで命を取られるわけではないので、皆さんが思っている以上に達観していました。

僕は決勝戦のアメリカ戦の国歌斉唱のとき、アメリカ国歌と一緒に歌っていたんですが、「来た、決勝に進んでここまで来ることができた」と、とても嬉しかったんです。ちよつと見方を変えてみると、「俺は幸せだな、苦しさは幸せなんだ」と自分には言い聞かせていました。

そう考えると、先生方も、教師を目指されて、校長先生になられて、大変ですけれども、子供たちの人生に関わつてあげたいと思われた夢がそこにあると思うんです。

編集部 苦しさを幸せと感じるというのはとても大事なことで、この立場にいられるということは、自分の力だけじゃなくて、いろいろな応援があつてこそと思います。だからこそ様々な運や縁があつてこの立場にいる自分というのとはとても大事にしなければいけないと栗山監督の御著書を読みながら感じました。

栗山 いえいえ、大変なのは分かつているんですよ(笑声)。分かつているんですけども、ちょっと発想を変えてみるとそういうふうに感じられる瞬間があるので、皆さんが七〇歳ぐらいになられて仕事が楽になられたときのほうが多分つまらないと思われると思います。何か使命があるというのは最高のことなのかと今僕は感じているので。

編集部 今お話を伺つていて、監督の言葉が非常に伝わってくるんですね。御自身のお考えを的確に伝えられていると思うんですけども、そういうふうに関心に思いを的確に伝えるということに対して日頃から心がけていることはありますか。

栗山 最初の頃は、例えば選手に話を伝えるときに、WB Cであれば、電話でもいいから直接伝えさせてくれと言ったり、手紙で思いを伝えたり、言葉を選ぶとか、それ

から場所はすごく気にしました。選手と話すときに、選手が元氣そうに練習しているグラウンドで立ち話で伝えたほうがいいこともあるし、一対一で監督室できちんと向き合つて伝えなければいけないこともあるし、どのようになれば伝わりやすいのだろうかというのは、もちろん考えていました。

今は、それもすごく大事ですけども、ふだん自分がどう思っているのかという作業をしっかりとっておかないと、目の前の選手に「言わなければいけないから言っている」のか、それとも、「どうしても伝えたい」と思つて言っているのかというのではちょっと違いがあつて、そのことを大事にしています。

要するに、言葉ではなくて——作家の五木寛之先生は、「人間には努力できない人がいる」とおっしゃる。他力本願の話でもあるのですが、そのところをどうしても五木先生に直接お会いして伺いたくて、お会いしたらめっちゃくちゃ腹に落ちました。先生も「人は直接会うと、言葉がなくても慈雨のように肌から肌思いが伝わりやすくなるんです」とおっしゃるんです。なるほどな、確かにそうだなと思つたんですね。ですから、言葉はすごく大事ですけど

も、そこに走ってはいけないときがあるというか、真つすぐに選手にぶつからなければいけないときがある。そのときに、言葉を選んである場合ではないと思うんですね。うまくしゃべらないほうが伝わったりすることもありますよね。そのところを大事にしなければいけないんじゃないかなと——すみません、この立場でそれを言うのはすごく変ですけども。僕はあれだけ言葉が大事だと言い続けている——言葉は大事なんですよ。ふだんはそれを考えて考えて考え続けておけば、あとは魂の部分でいいのかなという感じです。

僕も気が付きましたが、僕は話す距離が近いと選手が言うんですよ。見ていたら確かに、WBCでも練習のとき選手の正面にドンと入って話しているんです。邪魔ですよ。横ぐらいで話せばいいのに。でも、それは無意識なんです。伝えたくて真つすぐ選手の正面に立って話す。心と心で真剣に聞いてほしいということだろうなと思いましたが、これも、これは選手たち、若い子たちにはうつつとしいだらうなと感じました。

ただ、言葉がすごく大事で、工夫するからこそ、最後はその技術に走らないほうがいいのではないかとは思っています。

編集部 伝えたい思いがあるからこそ、それが言葉になって出る場合もあるし、寄り添うだけの場合もあるということですね。

お話に出た五木寛之先生、言葉を大事にしていられっしやる小説家の先生ですらそれが大事とおっしゃるんですね。

栗山 あれだけ現場に赴いて、人に会って、物を書かれる先生が何を感じられているのか。すごく勉強になりましたし、ずっとお会いしたくて、ずっとお会いすることができて、なるほどなと思いました。特に、コロナが明けてもなかなか生活がもとに戻らないというところがありますけれども、対面である——宗教というのは昔から面授、要するに一对一で伝えられてきたものであるということの意味とか、そういうものを教えていただくと、我々が考えなければいけないことというのはやっぱりあるのかなと思います。

編集部 対面のよさというのがありますよね。

ここで質問を変えさせていただきますね。

栗山 監督は読書家で、お忙しい中でも、電車の中とか、ちょっとした時間を積み上げて読書の時間を生み出しているって伺いました。いろいろな本を読まれていることと思います。そして先人から学ぶことがたくさんあったかと思う

んですが、最近はどういった本を読まれる傾向があるか、教えてください。

栗山 結構、幅広いですね。小説もすごく読んでいますし、哲学書みたいなものをもう一回読み直していたり、ちょっと気になる分野の小説を読んでいた。哲学ってもともと何なんだろうという哲学を分析しているような本が今結構出ているので、ああ、こういう考え方もあるのかと思って読んでいます。以前は、答えを探して、その答えがなかなかないので中国古典に手を広げるなどしていました。

監督のときは、小説はあまり読む時間がなかったんですよ。今、小説を結構読んでいますね。例えば、今年直木賞を取った「八月の御所グラウンド」という小説。これは沢村栄治さんという戦死した野球選手の魂、お化けの話ですけれども、これで直木賞を取れるんだと感動しました。多分、皆さんからすると「ふーん」という話なんですけど、僕的には「そうだよー」みたいな、昔起こったその場所に行っただけられるものというのがあると思っていて、答えは現場にしかないんですよ。その思いがあると、そこで何かふっと教えてくれることがあったりするというのを経験しているの、「そうそうそう」みたいながありますけれど

も、小説でそんなにみんなに「これ読んで」とか言ってもしょうがない——結構言っていますけれども（笑声）。

去年の三月までは背中を押され続けていたわけですよ。今は寸暇を惜しむというのがテーマですけれども、寸暇を惜しまなくても惜しまざるを得ない状況に背中を押されていたんです。「おまえ大丈夫か、そんなことでぐだつとしている場合じゃないよ」という感じでしたけれども、今はそうやってしまう可能性があるんですよ。そこは意識してやっています。

編集部 プロ野球選手の沢村栄治さんが幽霊になって出てくるというお話ですね。

栗山 そうなんです。戦争で亡くなった方ですが、きっと野球を本当にやりたかったのだらうなと思わせてもらえます。その前に短編があつて、それは京都での駅伝の話です。幕末の新撰組の隊士が一緒に走るという、普通に考えれば荒唐無稽な話ではあるんですけども、僕らのいうと、昔「フィールド・オブ・ドリームス」という映画があつて、そんなイメージなんです。——僕がそれを解説してもしょうがないですね（笑声）。

今、本当に幅広いです。ちよつと難しめの本も、逆に外

国のもの、この前、原稿で「星の王子さま」を書いたので、もう一回「星の王子さま」を読み直すとか、そういう感じですね。本当に幅広いです。

編集部 私も校長室に「星の王子さま」を置いて、いつも自分を振り返るときに読み返しているのですが、実は今、中学生があまり本を読まないんですよ。監督がよく取り上げていらっしやる論語の孔子の言葉であったり、易経——易経は難しいかもしれませんが、とにかく古典、特に私は国語科なので、古典文学に親しむという状況が中学生にないことが気になります。そういった中で、監督が中学生時代どんな読書生活をされていましたか。野球で忙しくて本を読む時間はなかったよというのはあるかもしれないですが。

栗山 学校の教育が悪くないですか、国語の（笑声）。

編集部 すみません。

栗山 いやいや、教育というか、要するにカリキュラムが子供のときに今みたいな論語の教わり方をする、論語って面白いんだなと思ったんじゃないかというような気がするんですよ。そういうことを教わらなかったじゃないですか。先生方はやりたいかもしれないけれど、国ですか、そ

れを決めるのは。

編集部 学習指導要領です。

栗山 歴史でもそうですね。僕は、歴史とかむちゃくちゃ好きですけども、僕の中では歴史はデータなんです。こうしてこうするとこういう結果になります…というのを実験・検証している。監督というのはそういう作業なんです。こういう場面でこういうサインを出すとかいう結果になるといいます。監督だけがデータを持っているという形になるんですけれども、こうした理由というのは人には言わないんですよ、コーチにも。話が逸れました…。

子供が本を読まない。それは、これだけスマートフォンやタブレットが普及している今の時代、仕方ないですね。でも、以前読んだ本に、電子書籍で読むのと実際に紙で読むのは全然効果が違うというデータがアメリカの文献で出ていて、やっぱりそうだなと思いました。それも声を出して読んだほうが全然いいらしいですね。昔の素読ですか。僕は論語の素読を一時期やっていましたけれども、これはどうでしょう、ぜひ先生方、大変ですけども取り入れてみてはいかがですか。

監督をやっていると本が読めない状況があったりします

が、思考の形が変わります。脳の何かの刺激が違うんですね。紙で本を読んでいると、トントントンと考えたことがまとまって、トントントンと返ってくるという感覚があります。ところが、どうしたわけか本を読んでいないと何かまとまりにくくなってしまふ。脳の仕組みがよく分からないですけれども、これは体験です。なので、ちゃんと本を定期的に読まなければいけないと監督のときに思いました。

僕は中学生のとき、ほとんど本を読んでいません。小学生のときはおやじが、すごく厳しい父だったのですが、本だけは何でも買ってくれたので読んでいました。ところが、小学校の最後ぐらいからは野球一辺倒になってしまつて、授業についていくのと野球をやることに全部の時間を取られるので、高校を卒業するまではほとんど本を読んでいないんです。大学に入って、野球部で僕のキャッチャーだったチームメイトが本が大好きで、その影響で読み出した。だから、もし子供のときにちゃんと本を読めていたら、もっと違う人生になったらうなと今思っています。

編集部 監督の読書好きは子供の頃からだろうか優勝に思っていたのですが、実はそうではなくて、東京学芸大学のときのチームメイトの方との関わりの中であったの

です。

栗山 そこから読み出して、本当に読み込み出したのは四〇歳ぐらいのときです。野球を三〇歳でやめて、一〇年間いろいろな仕事をしていたとき、勉強の仕方がこれでは自分が終わってしまう気がして、どうやって勉強していったらいいだろうと思ったときの感じからなんです。特に、監督時代というのは僕が練習に出なくてもコーチがいるので、監督は自分で時間を使えるので、そこは使わせてもらいました。本を読むのは選手の素振りと一緒に選手が夜中にバットを振っている、その分だけ僕らは本を読まなければいけないみたいな、そんな感じですよ。

編集部 監督は、いろいろな方と会っていらつしやうと思ふんですけども、人と会つたりお話をされたり、また本で先人から学んだりするときに心がけていることは何かありますか。

栗山 もともと自分が考えていることは全て間違っていると思つていて、自分が正しいと思つてしまふと人の話が聞けなくなってしまうので、そこは気を付けています。誰からでも必ず学ぶところはあります。僕、今しゃべっていますけれども、最近おしゃべりなんですよね。本

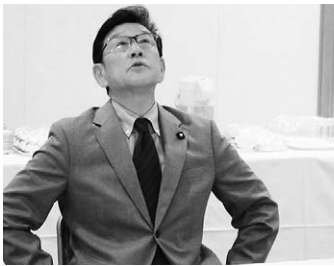
当はあまりしゃべらないようにしています。自分がしゃべっても僕には何も得にならないので。人にしゃべってもらったほうが教わることが多いですよ。なるべく黙ろうと思っているんですけども、何か最近おしゃべりですね。それは反省しています。

編集部 さて、次に私たちは中学校の校長なので、中学生のことについてお聞きしたいと思います。

今、日本の中学生は、他国の若者に比べて自己有用感とか自己肯定感が低いと言われていますが、監督の目には今の中学生の姿がどのように映っているのでしょうか。

栗山 どこに生まれるかというのは自分で選べるわけではない。例えば人に生まれるかもしれないし虫に生まれるかもしれないことも含めて神様が決めているという中で、ほかの民族がどうのこうのというのは一切関係なくて、ここに対しては中学生だけではなくて日本全体が言われていますよね。日本人が優秀だと言われた時代があったものが、今これだけ経済的にも政治的にも後れを取っている。ただ、先人の皆さんの功績とかやってきたことを見ると、僕はこの国に生まれて本当によかったなと思っっている。そのことをWBCで表現したかったというのは正直あります。

日本が世界一になるといふことの意味は、「さあ行くぞ、



俺は世界を取ってやる」と子供心に感じてもらうためではないかと思っっていたし、そういう意味では、自己肯定感が低いという中学生たちの感じを見ていて、ただ単純にぜいたく病なんだろうなと思っただけです。昔は食べるのも大変だった。何もしなければ食べられないわけですよ。ところが今は、大人になっても守ってくれる人たちがいっぱいいて、やらざるを得ない状況にならないので、それはなかなか難しいだろうなと思っるところがある。変な言い方ですけれども、それが駄目とかそういうことじゃなくて、絶対能力はあるし、頑張ったらできるところもある。結局、スポーツの世界にいて何が人の分岐点なのかというと、能力じゃないですよ。できないよな思っった瞬間に

できないんです、全てが。そういうことではなくて、これをやると決めてやり切った人がそこに行くというだけの話です。それは時間がかかるかもしれないですけども、そういうことなんだなと、一〇年間の監督生活で思っただけです。これは体験です。

もしかしたら今、本当に命がけで、野球ぐらい人生をかけて勉強したら、東大受験できるのかなと。合格できるとは言わないですけれども、結局、人が生きるといいうのはそういうことなのではないか。要するに、能力じゃない、本当に自分がこうするという確固たる志、意思というんですかね、それが何かのタイミングで得られれば、今の中学生たちも勝手に能力が伸びていくということのかなと、そこは信じています。そういう子供たちが、今はそう見えるけれども、必ずそういうものをもっている。そこにどうやって火をつけるか、どうやって灯をともしあげたらいいのか。僕はよく、「やる気の志には我々は火をつけられない」と言っています。本人しか火をつけることはできないので、我々はそのお手伝いしかできないと思うんですね。今その自己肯定感や自己有用感が育たない何かの要因があるというだけなのかなという感じで僕は捉えています。

編集部 私たち大人が子供たちのことを信じて、そして何か火をつけるきっかけや、気付かせてあげる場面ができたらいいんだらうなと今お話を伺いながら思っていました。

そういう中で、伸び悩んでいる子、何をしたいかわからない子というのも多くいるんですが、監督はこれまで優秀な選手を預かってきた中で、本当は力があるんだけれど

も伸び悩んでしまっただけで、それ以上にはいかないでスランプに陥っている選手を見てきたかと思うんですが、そういうったときにどのように導いてきたのか、教えてください。

栗山 それを全体的にいい方向に行かせられたかというところではある。ただ、自分の中でそういうときに何を考えていたかというところ、物を前に進めるときには一回逆に力を加えるじゃないですか。例えば、ゴムを向こうに飛ばそうとすると逆側へ引く。悩んで足踏みしているときというのは、やり方とかやろうとしていることが頭の中で一つの方向に固まってしまうので、一回思い切って逆方向のことをやらせるとか、全て取り払うとか、そういう話をしたりやらせたりすることを心がけましたね。

そういうふうに行っていると何が正しかったのかというのが分かったりするので、選手たちにそんなアドバイスをする。例えば、バットがボールに当たらないならもつとコンバクトに打ちなさい、いやいや、もつと大きく、ホームランを打ってみなさい、と言う。そうすると、自分の悪いところが分かって自分で工夫できるようになる。一つの方向ばかり考えるから、他のものが考えられない。

何かの本に、「日本人がここまで成長できたのは、専門分野ではないところを全ての専門家が勉強したからだ」みたいなことが書いてあって、なるほどなと思いました。要するに、それに特化し過ぎると凝り固まってしまうので、違う発想が生まれにくいことですよ。だから、僕も今みたいなことで悩んだときに、そういう先人の言葉や行動をそのまま勝手に置き換えているということがあります。

編集部 今お話を伺って、もしかすると、最初から専門教育で得意なところだけやるよりも、幅の広さというのが大事なのかと思いました。中学校で九教科を学んでいきまされども、その意味は、土台をつくるということでもあるのかなと思います。

そして、できない…：ここが伸びない…、というところを見るだけでなく、もう少し幅広く見ていってあげることが大事なのかなとも思いました。

栗山 勉強に特化しないで、その子が好きなもの、例えばゲームならば、このダンジョンをクリアするためにどういう工夫が必要なのかといったときに、ここそここの努力をしたらいんですよね、とか、ここでスピードを上げたらいいんですよね、というような、要するに違う分野でクリアできる。こうなったらこうなるんだみたいなものが参考

に——怖いですが、先生がそっち側と一緒にやってみるとか、僕はそういう発想なんです。

その選手に、なるほど、これはこうですよと言わせるために何をしたらいいかということも考えますけれども、人がこうしたほうがいいよと言ってもなかなか、その人が本気になってやらないというまじいかないですよ。自分で考えて自分で工夫するという作業だと思おうので、それは先生方が一番分かっているんじゃないかと思えます。僕らみたいに決められた何人かの選手ではないので、校長先生だったら何百人という生徒を見るわけですから、難しいとは思いますが、この子はこうしたらこうなるというふうに思い過ぎているから、それを壊さないと、同じ方向のことしか繰り返さないと思うんですよ。その子じゃなくてそばにいる側が一回頭の中を壊す、コーチとか監督が一回頭の中を壊す作業が必要かなと思っていました。

編集部 教員も同じで、凝り固まらないで柔軟に、自分のこれが正しいんだというような考え方とか感覚を一回空白にしてみることが必要ということですね。

栗山 自分は間違っているのかな、自分のさせようとしていることは間違っているんだと思ったときに、何か違う工

夫が生まれるということだと思っただけです。

編集部 栗山監督は教員免許をお持ちでいらっしゃるが、当初免許を取るときに、自分はこういう教員になりたいと思ったことをもし覚えていらっしやれば伺いたいです。また、今、仮に教壇に立って子供たちと向き合うときにどのような気持ちで子供たちと向き合うか。それは、免許を取ったときと今で違う部分、お考えがあると思うので、伺いたいです。

栗山 教員免許を取ろうと思ったのは、毎日違うことがいろいろ起こっていく中で、そういう環境だったら、大変だけれども自分が必死になれるかなということを感じていたからです。毎日同じ作業を繰り返すよりは、そのほうが自分が一生懸命になれるんじゃないかと思ったのと、人が成長するお手伝いができるというのは、こんなにうれしい仕事はないので、自分には能力がないけれども、子供たちと一生懸命向き合うことはできないかな、そんな気持ちでした。

ただ、今教員になったらと考えると——なるべく小さいときにちゃんとした大人に会わなければいけないんだと、安岡正篤先生が言われていますけれども、それが自分で大丈夫なのだろうかという不安はあります。僕みたいな人間

が子供と向き合ったときに、僕の人間性含めて大丈夫なのかなという怖さはすぐあります。ですから、教員免許を取ったときよりも、教壇から遠ざかったほうがいいという感じはあります。

もともと、人格がこれからできていく子供たちだからこそ、その人格を尊重しなければいけないと書かれている本を読んで、そのことは監督として選手たちに向き合ったことと一緒なので、できるのかなとは思いますが、何かすごく怖さを感じます。ですから、本当に先生方に敬意をもっていますし、人の人生に携わるといことがどれだけ大変なことかというのは理解しているつもりです。やるからには覚悟が必要なんだろうなと思いますが、誰かがやらなければいけないことなので。

昔、教職というのは仕事ではなかった、聖職だったという、そのことの意味みたいなものは感じながら進んでいく必要がある。僕らもそうですけれども、選手の人生を変えてしまう可能性があるという怖さはいつものもっていたので、そんなことは感じますけれども、今先生をやるのは無理です（笑）。

編集部 言葉だけではちょっと誤解を招くかもしれませんけれども、楽しいですよ。

栗山 そうですか。いやいや、分かります。それが多分学生のおもいに感じていた先生になりたいたいという気持ちだったのだと思います。自分がちよつとでも、この子がこんなことを考えられるようになったんだと思うだけでもすごくうれしはずですよね。分かります。分かりますけれども、怖さが先に立ちますね（笑声）。

編集部 今、中学生の話をさせていただきましたが、監督が全国の中学生に伝えたいこと、期待すること、大切にしてほしいこと、もしお話をする機会があったらどんなことを伝えますか。

栗山 去年、WBCが終わって講演などでいろいろなところへ行きましたが、やっぱり中学校が一番難しかったです。まだ大会が終わってすぐの頃は、さすがにみんなWBCを見ていたので話を聞く感じはありましたけれども、中学生の子たちに、こういうことが大切だから頑張ろうねみたいなことを伝えるのは難しかったですね。高校生になるとある程度大人になってきて、僕の立場も分かりますし、聞く子は聞いてくれるのですが。

ただ、僕の個人的な反省として、中学生のときに、好きなことだけではなくて、自分の体験とか経験とか学びとしてみてもっといろいろなことに触れていたら、もっと考え方の



幅が広がっただろうなと思います。今は気が付いていないかもしれないけれど、何でも吸収できる中学生ぐらいがめちゃくちゃ大事ですよ、だから何をしろとは言わないですけど、「後で後悔しないようにしてね」「今を大事にしてね」ということだけは伝えたいですね。

編集部 ぜひ、朝礼で子供たちに、監督がこうおっしゃっていたよと伝えたいと思います。

では、反対に私たち中学校校長に対して、中学校教育に望むことや監督が思っていることについて教えてください。ただければと思います。

栗山 それは先生方のほうが一番考えられているので、僕が何となくどうしたほうがいいとか言うつもりは全然ないです。

最初に言われましたね、WBCの超トップ選手三〇人をまとめるのは難しかったですね。僕もそう思っていました。ファイターズの監督時代もそうでしたが、こちらの魂を完全にぶつけ切ったときに、そのときは伝わっていないか



もしれないけれど、先生方の思いはいつか、それはもしかすると三〇年後かもしれない、先生方と一緒に年になつてからかもしれない。忘れていても、いつか必ずふと伝わる瞬間があると思うんです。僕は、そう思えていたからWBCでも頑張れたというところもあります。だから、片思いをしましょう…。相手に何かを求めたら、これで伝わっているのかなと不安になつて、やらなくなるじゃないですか。そういうことではなくて、とにかく人を信じてやり切つていけば、何かが伝わるかもしれないと思つています。いつか必ず伝わる…。何となく大変になつたら、そんなことを言っているやつもいたなと思ひ出してもらえたら嬉しいんです。

先生方が頑張つておられるのに、僕がお伝えすることはないです。大変ですけれども頑張ってください。

編集部 子供と接するのは苦しいときもあります、楽しいです。

栗山 今の子はあまりやんちゃしないですよね。

編集部 そうですね。

編集部 私の中学校は統合して四年目ですが、一年目まで野球部があつたんですけれども、部員がゼロになつてなくなつたんですね。ところが、WBCを見て今年入学してきた一年生からぜひつくつてほしいと要望があり、新入部員一六人で野球部が復活しました。

栗山 少しでも影響を与えたならうれしいですね。選手たちも喜ぶと思います。ぜひ続けてほしいです。

野球というのは訳の分からない難しさがあつて、ちょっとほかの競技とは違う教育的要素が含まれているスポーツです。意外と不平等を覚えるものだと思つているので、大変ですけれども、ぜひ環境をつくってください。

編集部 本日はお忙しい中、お時間を取つていただいてありがとうございます。お目にかかれて嬉しかったです。

*本インタビューは、令和六年五月十二日に行いました。

謙虚なお人柄と話すほどに熱がこもるお話ぶり、笑いに包まれた時間はあつという間に過ぎました。

このインタビューの前後の時間にも、取材や御講演の仕事が入つているという大変お忙しい中、快くお時間をとつていただきお話しくださいましたことに、心より感謝申し上げます。

(編集部長 熊谷 恵子)